

「家族の生成理論」は可能か

さきに、「家族の生成理論(草稿)」と題されたペーパーが発表された。この内容を仔細に検討してみると、あちこちに、看過あべからざる幾多の問題点が、目にとまらざるをえない。そして、それらは、その重要性にもか、わらず、当該ペーパーの筆者自身にも充分自覚されないうまま、故意にか未熟さ故にか、放置されている、と思われる。そこで、私は、以下、その「家族の生成理論」を批判的検討の組上りのばせ、それが抱える方法論上の問題点についてのみ、論述を展開してみようと思う。

「家族の生成理論」というペーパーは、方法論上の問題点以外にも、いろいろの内容的な問題点を含んでいる。たとえば、現在の家族社会学固有の関心、をもち、日本の「家」制度研究者の関心からみれば、あるいはまた、社会人類学固有の関心からみれば、このペーパーは、専門的批判にたえ、そののちもなお興味をひくに足るだけの、内容と水準とを、保ちえているのかどうか? しかし、こうした内容上の諸点については、あえて論じることをさしおこう。それには、私以外にふさわしい人も多勢おられると思う。私が、方法論上の問題ととりあげるのは、「家族の生成理論」において筆者の立場がいまいであるばかりでなく、当然論じらるべきであると思われる、基本的肝腎な事柄の多くが首かきられているため、いたずらに、そのペーパーの記述がわかりにくいものになっていること、しかし、以下にのべるような方法論上の整理を行うならば、そのペーパーの提擧する方

法論的構成が、かなり見易い形になると考えられること、にまごいっている。

私の結論は、この小論の末尾にのべられているが、そこに遡るまでには、そのなるかに手前から出発しなければならぬ。まず、「生成」の概念に改めて注目し、そのうち、生成文法の方法論を、くわしく検討しておく必要があるから、である。

I

「家族の生成理論」とは、「家族・親族領域」において開発・適用される「生成的な理論」である、と考えられていると思われる。とすれば、「家族の生成理論」の構想にとうては、つぎの2点が、まっさきに、方法論上の問題点として、あらわれてくるにちがいない。① ここにいう「生成(的な)理論」とは、一般に、いかなる方法をもった理論なのであるか? また、② それか、特定の固有領域(ここでは、「家族・親族領域」)で適用される方法となることにより、とくに、どのような特殊な方法論上の問題が発生してくるか?

「生成理論」を、もっとも形式的に定義すれば、「生成概念を中核にして、対象の妥当な記述を構成しようとする理論」だ、と言えるだろう。「生成文法」を、このようなものの祖型である、とみるならば、上の①を、「生成文法の一般化」と理解すればよい。しかし、ある特定理論を一般化する場合には、特定理論の前提条件を構成していった種々の要件が、一般化ののちにもあてはまるか否かを、確かめてみるなければならない。したがって、生成文法の前提要件はいかなるものであ、るか、一般化によってこれら要件のうちどれほどびうしなわれるか、また、「家族・親族領域」への特殊化によって何が新しく追加される要件があるのか、といった点を、まず考えるべきことになる。②を、このようにも書きかえられよう。

しかし、私は、「生成文法」を、祖型の位置におくことを、した

い。そのかわり、「生成文法 (=言語の生成理論)」、「家族の生成理論」のふたつを、対等なものとして、両者を、方法論の見地から、比較・対照してみることにする。これらと、11和10、生成理論一般の特殊なふたつの場合だ、と考えるからである。そして、両者から等距離にある、一般的な生成概念として、数学の生成概念を考えてみよう。それゆえ、まず私は、数学で「生成」という概念がいかにとり扱われているか、を瞥見する。

*

「生成する generate」という考え方は、もともと、群論のものであって、それ自体として、決して複雑なことをも、また、神秘的なことをも、あるわけはない。群 (group) とは、集合 (set) であって、とくに (i) 演算が成立し一義的であること、(ii) 結合法則が満たされること、(iii) 逆演算が可能であること、の3条件を満たすもの、をいう [稲葉 1957: 24, 41]。そこで、「生成」に関して、11くつか参考に存りそうな定義を、さがしてみよう。最も単純な、巡回群の場合には、あるひとつの元をえらんで、生成元 (generator) にすることができる。

《群 G に含まれる元 a が G を尽くすとき G は巡回群である。この元 a はこの群を生成するとよばれる。》

[Birkhoff & MacLane, 1965=1967: 180]

たとえば、平面図形を $\pi/2$ だけ回転する操作を、 R としよう。集合 $\{R, R^2, R^3, R^4=I\}$ は、 R もしくは R^3 を生成元とする巡回群である。

これに代して、たとえばベクトル空間では、つぎのように「生成」を考えることができる。

「ベクトル空間 V の任意の部分集合 V' に属するベクトルの任意の一次結合の全体 (これを、 V の部分空間 W とする) も、それらベクトルで生成された部分空間としよう。」

たとえば、3つの交わるベクトルは、それらを含むひとつの平面を生成する。

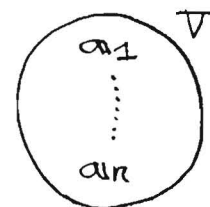
これ以外にも、さまざまな生成の類例を挙げることが、できるであろう (残念ながら、私の現在の知識では、それほど容易な作業ではないのだが)。ただ、それら類例にもあたらしく共通する「生成」概念の特徴をつかみだすことは、11まあたまたまからだけでは、たやすしいのではないが、と思わゆる。つぎのように考えよう。ある集合を生成するとは、要するに、その内の一定の要素から、ある形式的な操作 (のみ) によって、当該集合の要素のすべてを (そしてそれだけ) 派生させる (derive) ことである。

N.B. さらに言えば、生成は、派生 (derivation) による生成と、変換 (trans-

formation) による生成と、の2通りがある。以下に「ベクトル空間」を例にとろう。まず、派生による生成 (図1)。派生とは、 $(a+b)^2 = a^2 + 2ab + b^2$ の如き、恒等式による変換関係をいう。いま、ベクトル空間 V において、ベクトル、 a_1, \dots, a_n (の集合) が、その生成元

であるとは、 V の任意の要素が、 a_1, \dots, a_n だけから、適当に派生される。

このことを11みる。



$$\forall a = \varphi(a_1, \dots, a_n)$$

図1

V の要素の全体は、その生成元 a_1, \dots, a_n のある派生として表現されるわけであるが、また、これを逆に考えれば、 V は、生成元 a_1, \dots, a_n に、ある仕方でも還元される、と見られる。おなわち、生成というPTTPは、還元主義 (reductionism) と、切、2E切切のい関係にある。

11ひとつ、変換による生成 (図2)。ここでいう変換とは、関数による変換をさしている。ベクトル空間 X から Y への写像、 f を考えよう。 X の要素は $y = f(x)$ なる方程式によって、 Y の中に写像される。ここで、 X の部分空間 X' の要素のみから、 Y の全体がえらばれるようなとき、 X' は、 Y の、変換による生成元になっている、というのである。

以下の行論では、派生による生成を念頭においているのだが、変換による生成も、生成の概念の本質においてはその点と異なるところがないから、いちいち区別はしなくていいであらう。

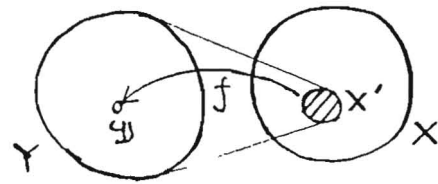


図2

**

私がここに注目しているわけにはいろいろあるが、生成という概念をもちこむことにより、問題とされる集合についての知識が、理想的な仕方で、正確に縮約されるようになること、である。これは、ひとつには、生成が、集合のなかの相対的に少数の要素から出発すること、もうひとつには、生成が、全くの形式化された操作にしかおられないこと、にもとづく、といえるかもしれない。

なにかよく性質のわかっていない集合があったとする。その集合のおのおのの要素はいろいろあるものであるか（そして、いろいろあるものでないか）が、いま必要な情報である。ここで、もし、この集合の生成元を見つけたとすれば、この情報は、すでに与えられたことになるだろう——生成元の集合がいろいろあるものであり、生成に用いる形式的操作がいろいろあるものであるか知らなければ、いま問題となっている集合を、完全に特定する（それに対して適切な記述を与えることができる）からだ。

このように、ある集合の「生成」を考へようことは、対象であるその集合についての情報を厳密な仕方で縮約できる、という効果をもたらす。ところで、私が思うには、直接に与えられている（一次的な）対象（を構成する諸要素）に関する情報を、このように、ある適切な形で縮約することこそ、「理論」の本質なのである。

N.B. なお註記（における）同一の集合を生成させる場合も、その派生の仕方は、（たとえ、同一の生成元から出発したとしても）たゞひと通りしかないのである。つまり、ある対象に関する適切な理論は複数存在可能である。

II

1956年ごろ、Noam Chomsky は、彼の独創により、生成文法 (Generative Grammar) のパイパイを、定式化した。これは、言語理論に明確な目標と方法とを与える一般的な枠組みであったため、私たちの内にも、世界を席捲するに至った。たとえば、Chomsky に先行する、構文言語学の用いていた、直接構文系分析という自らの方法に無自覚な手はずは、生成文法のなかでは、そのひとつ、句構文文法として定式化され、怒るべき位置を与えられることとなる。かくして、生成文法の思考法は、今日の言語（文法）研究の主領域を占め、基本原則をなしているのであるが、その一方で、数理言語学という新しい分野を築き上げる刺激としても、重要な貢献をなしたのである。

初期の Chomsky が開発したさまざまの概念装置は、数理言語学の中で、厳密に定式化された。その一部を、以下に略述しよう。

$$V = \{a_1, \dots, a_n\} \quad \langle 1 \rangle$$

(有限数の要素記号からなる任意の集合を、語彙 V (vocabulary) とする)

$$V^* = \{a_1, \dots, a_n, \varepsilon\} \quad \langle 2 \rangle$$

(語彙の要素の全ゆる連鎖の集合を、 V^* とする) (ε : 零連鎖)

$$L \subset V^* \quad \langle 3 \rangle$$

(V^* の (有限もしくは無限の) 任意の部分集合を、言語 L とする)

$$x, y \in V^* \rightarrow x \cdot y \in V^* \quad \langle 4 \rangle$$

(x, y が V^* に属する連鎖であるなら、 x, y の連結 (concatenation) $x \cdot y$ もまた、 V^* に属する) ($x \cdot y$ を、たんに、 xy と書く)

$$G = (V_N, V_T, P, S) \quad \langle 5 \rangle$$

(文法 G とは、非終端記号の集合 V_N , 終端記号の集合 V_T , 書きかえ規則の集合 P , 始発記号 S , の4つの部分からなる)

ただし、

$$V_N \cap V_T = \emptyset \quad \langle 6 \rangle$$

(非終端記号であって、なおかつ終端記号でもあるような記号は、存在(ないものとする))

$$P = \{ (u, v) \mid u \in V_N^* - \{\epsilon\}, v \in (V_N \cup V_T)^* \} \quad \langle 7 \rangle$$

(書きかえ規則の集合 P とは、空でない非終端記号の連鎖 u を、適当な連鎖 v に、書きかえるという型の規則の、有限の集合である)

$$S \in V_N \quad \langle 8 \rangle$$

(始発記号は、非終端記号のひとつである)

$$\begin{aligned} \omega \xrightarrow{G} y &\iff \omega, y \in (V_N \cup V_T)^*; \\ &\exists z_1, z_2, u, v, \mid \omega = z_1 u z_2, y = z_1 v z_2, \\ &u \rightarrow v \in P \end{aligned} \quad \langle 9 \rangle$$

(文法 G が、連鎖 ω から連鎖 y を直接に派生するとは、集合 P のなかのひとつの書きかえ規則を用いて、 ω から y が導かれること、いう)

$$\begin{aligned} \omega \xrightarrow{G}^* y &\iff \exists \omega_0, \omega_1, \dots, \omega_r; \\ &\omega_0 = \omega, \omega_r = y, \forall i \mid \omega_i \xrightarrow{G} \omega_{i+1} \\ &(0 \leq i \leq r-1) \end{aligned} \quad \langle 10 \rangle$$

(文法 G が、 ω から y を派生する (derive) とは、 P の1つ以上の規則を用いて、 ω から y を導けること、すなわち、

$$\omega = \omega_0 \xrightarrow{G} \omega_1 \xrightarrow{G} \dots \xrightarrow{G} \omega_{r-1} \xrightarrow{G} \omega_r = y \quad \langle 11 \rangle$$

なること、をいう)

$$L(G) = \{ x \in V_T^* \mid S \xrightarrow{G}^* x \} \quad \langle 12 \rangle$$

(文法 G によって生成される言語 (language generated by G) とは、始発記号 S から派生される任意の連鎖のうち、非終端記号を含まないもののすべてを、いう)

数理言語学の課題が、以上のように定義された文法 G の語性を説明することにあるのは、もちろんだ。が、なかでもその中心

的関心は、深奥 $V_N \cup V_T$ をともかく固定した上で、書きかえ規則 P によりなる制限を付した場合によりなる言語が生成されるか、

という点に、もっぱら注がれることにある。文法は (としてまた、
それによって生成される言語も)、制限条件の弱いものから強いものへ順に、0型 (type 0)、1型 (type 1)、2型 (type 2)、3型 (type 3)、と分類、命名されるが、そのおのおのの関係は、

$$L_0 \supseteq L_1 \supseteq L_2 \supseteq L_3 \quad \langle 13 \rangle$$

のような、順次包含関係にある。

Chomsky は、人間の自然言語が、3型文法 (いわゆる有限状態文法) によって生成し得ることを示した。人間の言語は、1型~2型言語のどこかに位置を占めるはずだ、と考えられていた。ところが、Chomsky が説明した変形規則を含む文法は、多くの言語事象を適切に説明する反面、それだけでは制限がゆるすぎで、0型の文法となってしまうことがわかった。そこで、目下、変形生成文法派の研究は、変形規則にどのような制限を付せばよいか、を説明する作業を中心にすすめていっている。

*

この小論の目的は、言語学上の諸問題、言語領域に固有の諸問題にたいすることではない。ただ、私が、上のような、数理言語学による生成文法の定式化を紹介したのは、そこから拾いあげるとき重大な社会(科)学的含意に、注目したからなのである。それは、ひとくちに言えば、つぎのような見通しなのだ——生成文法のロジックは、規範分析の枠組の理念型を与えるものである、と考えることが、できるだろうか?

私がそう考える理由を、順に示してみよう。それは、言語学を、つくりだすの、社会(科)学として読みかえり作業として、すすめていける。

まず、 V (vocabulary) とは、考察する事象を構成すると考えられる、要素的存在を、意味する。

N.B. 語彙 V の各要素が、互いに他と区別され、それ以上分解される余地のない

のとして存在しているのは、むしろ、全体として、並立(ある)範疇のシステムを
持っていることに、根拠をもっている。この、並立(ある)範疇は、人間の発
揮する発音能力が、当該社会の共同規範の一層位として、定着したも
のだ。語彙が有限であるのも、語彙の、並立(ある)範疇としての本性にもと
なっている。

つぎに、 V^* は、およそ生起しうることのランダムな全体を、い
みする。

N.B. random であるとはいっても、個々の事象は、社会過程の中で生起するもの
として考えられているから、あくまで、語彙 (すなわち、共同規範として実
現されている 並立(ある)範疇) の範囲内にあるしかない。

さて、最も大切なことであるが、 L (language) は、生起すべき
ことの全体を、すなわち、当該社会の共同規範によって積極的に評
定されるような社会事象の全体を、指定している。

N.B. $V^* - L = L^c$ が、さうして、生起すべきからざることの全体を、すなわち、
当該社会の共同規範において消極的に評定されるような社会事象の
全体を、さあのはもちろんである。 $L \cap L^c = \emptyset$, $L \cup L^c = V^*$ とは、
形式的にはあたりまえのおにみえでも、実際には、さうして大胆な抽
象であり、思いきった単純化である。というのは、あらゆる社会事象を、
2つに直に分け、その一方を肯定、他方を否定するものとして、社
会の共同規範の存在を想いながっているからだ。

言語 L は、語彙 V とともに、所与の集合として与えられる。す
なわち、言語 (適格 (well-formed) な文の集合) L は、言語理論に
先行する客観性として想定されており、言語理論 (すなわち、生成
文法) にとっての、外的規準 (external criteria) として、はたらく。

文法 G は、言語 $L(G)$ を生成させるようにつくられた装置である。
言語研究の課題とは、ある言語 L を外的規準 (標的) にとり、それを
生成するようす、すなわち、方程式

$$L = L(G) \quad \langle 14 \rangle$$

をみたすようす、形式的な装置 G (L の生成文法) をつくりあげることである。

N.B. $\langle 14 \rangle$ 式をみたすような G は、すなわち のべたように、必ずしも 限らないから、
言語理論は、すなわち のべた外的規準 のほかに、理論の内的規準 ともい
うべきもの——たとえば、簡潔性 (simplicity) の規準——をも、備え
つけていなければならない。理論の内的規準は、理想的には、 $\langle 14 \rangle$
式をみたすような2つの文法 G_1, G_2, \dots を、理論としての「望ましき」順
に順序付ける、評面の規範を与えるものではない、ならぬ、
と考えられる。

$\langle 14 \rangle$ 式は、生成文法 G の、記述的妥当性を、保証する。 G が記述
的に妥当である、とは、規範 L/L^c の存在を理解するとき、そ
に潜在する潜規則 (latent rules) G が規範 L を構成している実体で
ある、と解釈してもよいことを、意味する。当初、所与の社会規範
は、 L/L^c の如く、事象を列挙する仕方を把握しているにすぎな
かった。しかし、生成規則 G を考察することにより、その社会規範
は、より抽象的な規則の体系 G のなかに、縮約・還元される結果と
なる。生成規則は、対象の記述を、列挙型 (deictic form) から、
函数型 (functional form) へと、変換する、と言えよう。

規範 L が、事象の無限集合であるようなとき、 L を L^c (逸脱) か
ら区別する知識ないし論理を、 G という有限のものとして抽出する
ことが、決定的な重要性をもつことになる。規範は、表層におい
ては、 L/L^c の対立として存するのであるが、それを、より本質的に、
少数の階層的な規則の体系としてつかみとらるとするならば、これらの
規則体系は、理論として、きわめて高い価値をもつのである。

N.B. 人間の自然言語は、実際、適格な文の並びを列挙するにせか不可能で
あることからいけるとあり、無限の要素からなる集合である、と考へなければ
ならない。しかも、人間は、このおぼろげな自体無限集合である言語を、す
なわちの逸脱文から区別する能力がある、と考へておくべきであろう。
とすれば、人間の発音する言語能力を、言語 L を生成する装置 G とし
てとらると、重要な意義をもつことになる。生成文法の枠組みの存が
ては、人間が言語活動のなかで発揮する創造的能力は、言語が
無限集合であるという仮定のなかに、一切にめられているからだ。

III

前節で、私は、便宜上、生成文法による言語分析を、規範分析一般として読みかえようとする如き叙述を、行なつた。しかし、すでにのべておいたように、私の企図は、生成文法と対等な、家族・親族事象の生成的記述が、可能であるかどうか、その方法論上の問題点を検討するところにある。すなわち、ここでは、以下、生成文法が、特殊言語領域における理論であることによつて、いかなる特殊性にまつていかにそれを別出しておくことで、前節とのバランスをとつておかなければならない。

数理言語学へ変形生成文法理論を移植した方法を、規範分析という一般的存在のもとで、存がめ多きことができる。しかし、この視角は、同時に、言語の生成的記述がかかえるさまざま固有の問題を、うきたせもするのだ。私の考えでは、これらの主要な、最も特徴的な部分は、外的規準たる折与の集合の性質に由来する、とみとめることができる。こうした性質とは、当該領域でまじあたり観察される対象が、集合として固有する、特徴的な性質である。

言語という集合を特徴づけるのは、いうまでもなく、それが記号連鎖 (string) の (無限) 集合である、という点である。

① 言語上の要素が、記号連鎖であるということは、生成文法において、要素的存在 (V) の線型配列だけが、真ら考察の対象となつていふことを、いみする。要素の間では、前後関係のみが、(少くともその表層において) 唯一の基本的な関係であるのだ。言語は、互いに区別されるこれら無数の連鎖の集合であり、しかもそのそれぞれに、はじめと終りとがある。

② また、言語は、当該の社会 (言語共同体) に属する任意の1個体のうみだち (可能性のある) 記号連鎖の (無限) 集合であるという点で、人間の言語能力の全幅をこの限りなく表示する、と考える理由がある。言語は、実現された社会規範であるが、それは、集合的営為としてではなく、個体の営為として、実現されている。

ここにあげた ①、②の点は、社会事象一般に対して「生成的存」記述を構成しようとする場合に、その前提を構成すると考えるゆえにはいかなるであろう。すなわち、

①' 社会事実を構成する要素的存在を、いかなるものとするにせよ、これらの結びつきは、線型配列であるというより、むしろ、一般に、多方向的、空間的な配列であり、と予想しておくべきである。

②' また、当該社会の規範は、個体的活動の中で直接実現されるというより、むしろ、それら個体相互の社会過程のなかで、たとえば、集合的事象、集団形成、……のなかで実現される、と予想しておいた方がよい。

すなわち、①、②として示した、言語上の、外的規準としての特性は、言語事象に固有のものであるにあらず、生成理論一般にとつては、偶然的な特性である。

*

いまのべた理由によつて、「家族の生成理論」のような構想——言語領域以外の固有領域において、生成的記述の体系を、構成しようとする試み——には、少くとも、方法論上、2つの難関 (break through point) が、まじらうことになる。

①' 記号連鎖の如き線型配列を生成する理論は、生成文法として、数理言語学的な定式化のなかで与えられたい。では、線型でないような要素の配列の集合を生成するような規則を、定式化することは、できるのだろうか？

②' かりに、集合的な社会事象に対して、ある妥当な生成的記述を与えることができたとして、そのような「生成」規則を、適切に解釈する枠組みが、みいだせるだろうか？

このうち、①' の点については、数理言語学ないし計算数学の内部でも、いくつか生成文法を拡張する試みがあつて、たとえばウェブ文法 (Web Grammar) の如きは、線型配列ならざる平面グラフの集合を、生成する規則の形式化として、ある程度の成功をおさ

めこいる(大芝[1977])。

②^o についで。Chomsky の生成文法のアイデアが大きな反響をよんだのは、彼の普遍文法が、人間の生得的な心的機制に対応すると考えられ、言語学を、心理学の一部門として解釈することが可能であったことも、大きな要因であった。ところが、集合的事象を生成的に記述する場合には、その結果ひとつの普遍性につきあたったとしても、それを特定の物体と結びつけて解釈することがむづかしい。そこにはおもしろく、「集合表象」概念を扱おうとする際に人がみまゆれると同様の、解釈の困難さがひそんでいる。

①^o、②^o は、社会事象の生成理論を考えようとするとき、人がみまゆれるであろう、創発的な諸困難である。こゝらば、理論の外的規準の性質にもとづくものであった。しかし、外的規準そのものが、すでにある種の抽象化の産物であることも、忘れてはならないだろう。

生成文法の枠組みでは、外的規準である言語 L (V^* - L^c) が、ある理想化のプロセスに先行されている。「生成」という概念は、「発話」と結びつくものではない。Chomsky は、コミュニケーションの場面を捨象し、話し手 (speaker) - 聞き手 (hearer) に中性的 (neutral) な、単なるデータとしての記号連鎖の集合としてだけ、言語 L をとりだしている。このような抽象化は、きりめを生成的であった、が、すでに捨象してしまつたものについで、理論は何ひとつのバリエーションもないことを、心にとめておくべきである。

このように、言語の生成理論は、たしかに、具体的コミュニケーションの場面、発話と受話、受話にのみきつづく規制を、あきらかに捨象している。では、ありうべき社会の生成理論は、どのような理想化を必要としているか、と考えるべきなのであるか？

言語理論との類比で考えるならば、社会事象の直接に観察可能な水準に、理論の外部規準を定めることは、できないだろう。社会事象に固有の秩序性を与える層位——規範——が、生成的に記述の対

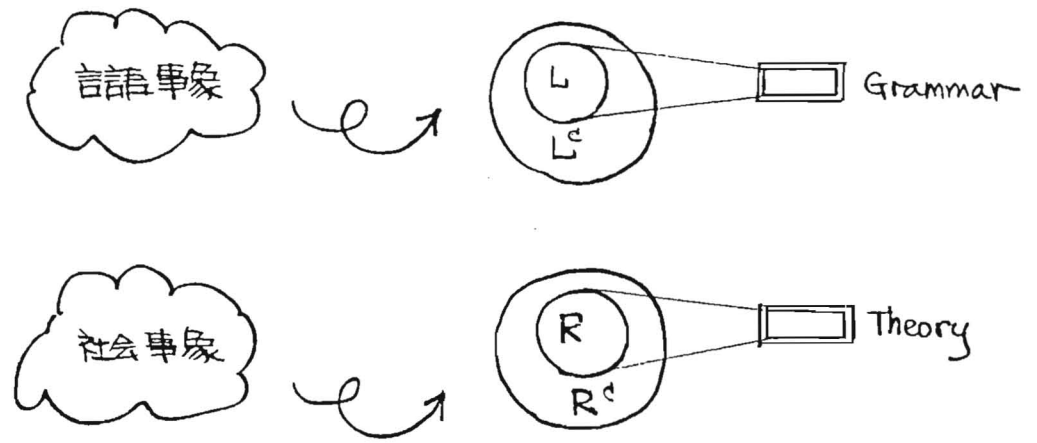


図3

象として、しかるべき仕方によってとりだされるべきではない。社会規範を構成する対立 R/R^c が、そこにある。もし、社会事象が、いかなる意味でも、規範的対立 R/R^c を含まないとするならば、社会事象は、ランダムな過程であつて、規範によって説明する余地を含まないことに存する。実際には、そのようなことはないのであつて、ある特定タイプの事象が、不適格 (ill-formed) なし逸脱であるともみまゆる程度には、社会事象は、規範による制御をうけていなければならない。このような規範を、できるだけ厳密に定式化してとりだすことが、生成的に記述に先立って必要とされる手続きなのである——そのような理想化にともなう落差は、言語理論の場合よりも、ずっと大層なものであるだろうけれども。

IV

これまで、私は、特定の生成理論を方法論的に点検する場合のチェック・ポイントを、いくつかリスト・アップしてきたつもりである。そこで、さきの『家族の生成理論』の場合、そこに採用されている方法が、十分な根拠をもつ、としてまた適切な、方法であるといえるかどうかを、あれこれ吟味してみても、よいのである。しかし、実は、『家族の生成理論』は、なお論じておかなかつた、大

きな方法上の問題性を、もうひとつ含んでいる。そこで、私は、ま
ずこの点から、論じはじめることにした。

『家族の生成理論』は、格別の説明もなく、普遍部門(Universa-
listics)、特殊部門(Particularistics)、実用部門(Agmaties)
よりなる、3部門構成を探る、このべて113が、私は、これには相
当の問題があると思う。3部門構成の根拠をほり下げ、方法論的な
含意をうかがみださねばならない。

上記3部門は、一見、普遍文法/個別文法/語用論、という、言
語理論の3部門構成と、対応するようにも、受けとられる。しかし、
実は、そのなかみが、言語理論の場合と別ものである点に、注目す
べきだろう。『家族の生成理論』の図2(8頁)をみれば、それが
いかにも、言語理論と瓜二つの生成装置を採用しようとしているま
うた、思われる。しかし、実のところ、図2のパイナPは採用され
ていないのであって、実際に採用された図3(9頁)の構成と、図
2との間には、大きな落差がある。

N.B. 図2のパイナPが採用されていないことは、「変形規則」が以下のど
にも用いられていないことにより、全く明らかである。すなわち、このことは、当然で
あるともいえる——というのは、すでにみたように、生成文法とは、記号
連鎖の集合を生成する規則の体系である、として、「変形」なる概
念は、記号連鎖をみちびく場合に、句構造規則だけでは不十分に
(か生成できないことが)はしかめられたときに、はじめに考えられた規則
であった。このことからいえば、生成規則が変形部門を含むかどうか、
といったような問いは、記号連鎖を生成させようとする場合のみ意味が
あるのであって、こうした前提が成立していないのに、図2のおお「変
形」を含む規則を考へることは、さしあたり、ひとつの「比喩」の域を
出ないから、である。たまた、同じ理由で、「家族の生成理論」に
type grammar といった概念が成立しないのは、もちろんのこと
である。

では、文法理論の3部門構成と、ここを示すべしである、『家族の
生成理論』の3部門構成との間には、どこにどのようなちがいがあ

るのか？

文法理論は、ひとつの自然言語を共有する個別社会のおのおのに
おいて、その言語を生成するような個別文法を、構成する。普遍文
法は、これら個別語文法に関して妥当する一連の命題からなり、よ
り上位の理論であり、これら個別語文法を基礎づけ、限定づけるも
のであると解釈される。

それに対して、『家族の生成理論』では、規範を要する個別社
会のひとつひとつに、即ち、生成的な記述を構成しようとしているの
では、ない。個々の社会を適格とされる家族・親族領域の秩序は、
個別言語のよう無限集合として与えられるのではなく、たかだか
いくつかの家族・親族タイプにすぎないから、生成的な記述の外部
現象としては、きわめて頼りないものである。というわけで、『家
族の生成理論』は、言語理論をいう個別文法に相当するような生成
装置を、提案してはいない。

N.B. たんに個別社会の(家族・親族領域における)規範を、これとして理解
するだけである。生成的な理論構成をとることの利点は、大きなものでは
ないだろう。規範を直接に記述するとしても、これに必要な情報は
比較的少数であって、これを縮約すること自体に、大きな価値があ
るとは言えないから、規範は、適格な配列の集合の要素を列挙する、と
いう仕方でも、容易に把握されてしまう。かくして、家族・親族領域
において、個別社会がかかえるといふ規範は、それ以外の社会
の中で、機能論的な枠組みの中で、社会化理論に即し
て理解されるおにように思われる。このおに仕えに対して、明
確な一貫した方法論的な批判を対置したのは、人類学にお
ける構造主義なのであるが、私は、一般に、個別語社会を比
較する視点が、規範の機能論的理解をのりこえる鍵をな
している、と考えておくことにしよう。

では、『家族の生成理論』は、一体いかなる外的規準を標的とし
てもつ、いかなる生成装置を、構成しようという「生成理論」なの
だろう？ 『家族の生成理論』の記述を、よく読んでみると、ど

うやら筆者は、人類が構成しうる親族・家族形態の全体を、生成装置の外的規準と考えているに過ぎない。そうだとすれば、「家族の生成理論」は、生成文法の枠組みとは異なり、全体としてたゞひとつの生成装置を提案してはならない。先の特殊部門は、そのような単一の生成装置の 1 下位部門にすぎない。

＊

「家族の生成理論」の二のような構成と、変形生成文法派の構成との相違を、方法論的に検討してみることは、なかなか重要なと思われるので、いま少し、論述を重ねよう。まが、両者の構成の差異を、直観的につかむため、次頁に見取図を用意してみた(図4)。言語の生成理論(図中(a))と、家族・親族の生成理論と、を注意深く対比してみる。

まず、言語学の場合。次頁(a)で、 G_1, G_2, \dots, G_n と示されてあるのが、各自自然言語に対応する、個別生成文法である。いま、想定すべき個別の言語/社会(いわゆる言語共同体)が、 n 個あるとしよう。そのうち、第 i 番目の言語/社会の、(原理的に)観察可能な言語事象の総体は、図中 $L(i)$ として示されている。言語研究者は、これを直接とりあつかうかわりに、資料の理想化をおこなひ、言語規範 L_i / L_i^c を抽出する。無数に考えうるあらゆる文のあつてを、適格か不適格かによって判断する能力として、当該社会の各個体がとらえておくと想定される言語直観を考えたおく。この L_i が生成的記述の対象である。 L_i を生成させる、すなわち、 L_i に関して記述的に妥当な、文法 G_i がみいだされたとすれば、それは当該言語/社会に属する個人の言語直観を説明するそのものなのだ。資料 L_i を妥当に記述する文法 G_i が複数えられた場合には、理論内的規準(たとえば、簡潔性の規準)によって、その一つがえらびられるであろう。第 i 社会の言語 L_i の文法 G_i は、外的規準 L_i および内的規準のみを考慮して構成され、それ以外の要因、たとえば第 j 社会の文法 G_j ($j \neq i$)に関する知識によって、直接左右されることはない——もっとも、実際には、あとから分析される

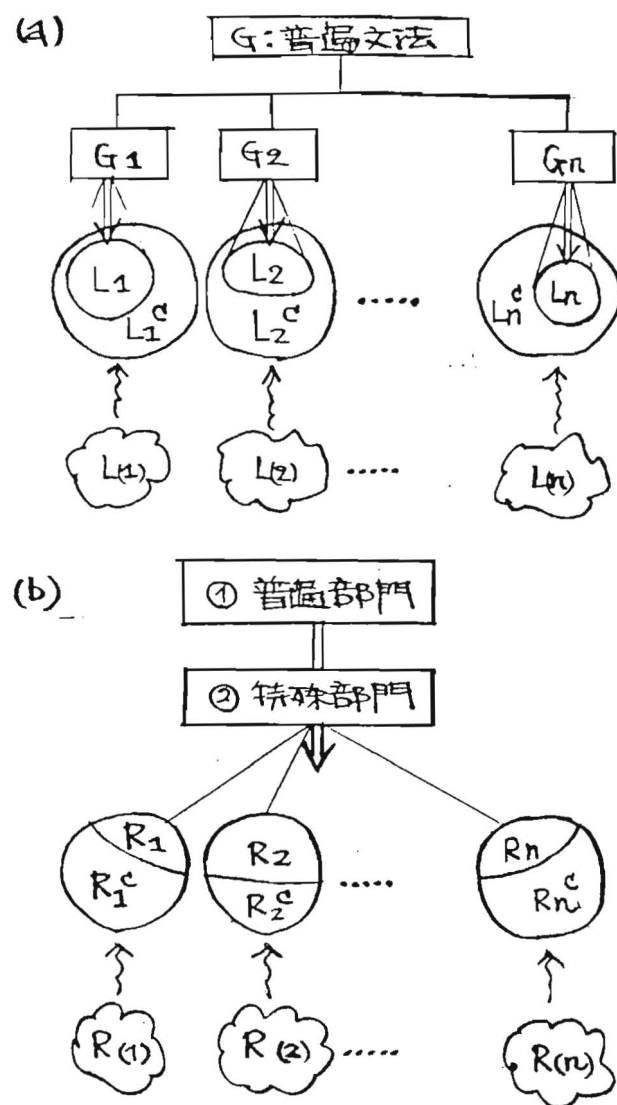


図4

言語の文法は、すでにえられたいくつかの言語の文法がどのようなものであつたかという知識を外挿的に一般化したとらえる予想によって、当然影響されるであろうけれども。すべての言語に関して、 n 個の個別生成文法がえられたとすれば、それら G_1, \dots, G_n に関して一般的に妥当する命題群がみいだされる(とみこまれる)。普遍文法とは、この、個別文法全体に関して成立つ経験的-一般化の命題群である。このように、生成文法の理論構成のなかには、 n 通りの生成的記述と、 1 通りの

経験的-一般化とが、存在するはずである。

つぎに、「家族の生成理論」のなかで採り出されている理論構成は、上の(b)図で示される。第 i 文化/社会の、家族・親族事象の具体相は、 $R(i)$ であらわされておられる。このうち、当該社会で理想化されたある部分のみを抽象し、 R_i / R_i^c という対立をうる。規範 R_i の存在が、反規範 R_i^c と対立することによってだけ保たれておられることは、先の言語規範の場合と、変わるところはない。さて、「家族の生成理論」の見解によれば、規範 R_i / R_i^c は、それを構成する要

素的な存在として、一連の家族・親族空間における関係性——いわゆる、「家族の基本範疇」——をもちいている。そして、これらの統合構造（出自規則、ないしは、家族・親族集団の形成原理）、連合構造（婚姻規則）のそれぞれがもしくは双方において、自らを構成しているのである。ところで、個別社会における個別規範 R_1, R_2, \dots, R_n は、その全体が一連の変異 variations をなす、ととらえられている。ここに、「家族の生成理論」の構成が、さきの生成文法の構成と、いちがひしく相違する点である。個別文化/社会の規範 R_1, R_2, \dots, R_n は、それぞれが「言語」に相当するのではなく、単にひとつひとつの「発話」なしか「文」としか、みられていないかのようだ。そのように筆者が考えるのは、私のみるところ、個別規範の基盤に、「語彙」の共通性をみとめておけるから、であろう。（もちろん、ここでは、「語彙」を、比喻として用いている。） R_1, R_2, \dots, R_n は、共通の語彙の上に立つ、一連の構成物（個別社会の規範体系）というふうに考えられている。そして、さきに言語 L_i に対して文法 G_i を考えたように、今度は、個別規範の全体集合 $\{R_1, R_2, \dots, R_n\}$ に対して、その理論（ないし、生成装置）を考えることができる。この理論自身は、語彙および共有されるいくつかの規則を含む普遍部門 (①)、選択的な諸規則よりなる特殊部門 (②)、のふたつの部分に分割されているようだ。個別規範に対しては、上の①、②に含まれる諸規則の一部を用いた、それに然るべき派生

$$S \xrightarrow{*} R_i \quad \left(\begin{array}{l} \text{かりに } S \text{ のおなじみ記号を考えておく} \\ \text{ことができれば} \end{array} \right) \quad \langle 15 \rangle$$

が対応する。ゆえに、 R_1, R_2, \dots, R_n に対する派生の全系列を見出し、それを形式的に整理することによって、上の①/②の区分をすることが、できるのである。以上のような「家族の生成理論」の構成の特徴を、生成文法との対比で諸氏は、こう語る——そこには凡通りの派生と一通りの生成的記述とが含まれる、そして、経験的一般には、普遍部門を抽出、構成するとき働く。

N.B. 実際には、 R_1, R_2, \dots, R_n の多くは、互いにきりめどく似通っている。

う（すなわち、その派生は、互いに多くを共有している）。ここから、規範をいくつかの下位に分けることが、可能にあると思われよう。

**

「家族の生成理論」は、なにゆえに、このように生成文法と異なる構成を採っているのだろうか？ ひとつの理由は、すでに述べたように、家族・親族領域では、語彙が共有されていると考えられるから、である。しかし、もうひとつ、生成的記述という方法の持つ特質に、目をむけておくべきかもしれない。

生成文法がそうして来たと同じように、個別文化/社会の規範に対して、おのおの互いに独立な生成装置を考案するとしたら、どうだろうか？ それは、可能であるが、きりめどく興味のあるものになる。なぜならば、生成文法の場合には、それ自体無限集合である個別言語を、生成規則を用いて、函数型に書きかえることによって、生成理論が莫大の情報的価値を有した（10頁参照）のに対し、個別文化/社会の家族・親族規範では、有限の、ごく少数の選格パターンを指定するにすぎず、その規範を、生成規則によって、列挙型から函数型に変換したとしても、情報的価値はそれほど高まらないだろうから。それに反して、個別規範ではなく、これらの全体 $\{R_1, R_2, \dots, R_n\}$ を、ひとつの生成的記述の外的規準として採用することは、十分に興味あることである。というのは、ひとつには、いまの述べたように、生成概念の本義は情報の縮約作用にあるといえるから、人間の家族・親族領域におけるあらゆる規範のパターンのような、有限ではあるがきりめどく多様なあり方をなす事象の全体を、生成的に記述できるとするならば、それは大いに意味があるといえるからだ。それに、もうひとつには、このような仕方こそ、人類学が無自覚に駆使している比較法の原理を、とことんまで発展させ形式化したものである、と言えようから、存である。「家族の生成理論」における、図4(b)のような構成こそが、（社会人類学における）構造主義の主張の、唯一正当な形式化であるのかも、いえる。

V

「家族の生成理論」においては、具体的にどのように生成的記述を定式化するのかが、に関して、そのアイデアの断片が示されておるのみであった。全体的な形式化の提案は、行なわれていなかった。そこで、二つを明らかにした方法論上の特色をふまえてながら、どのような形式化が可能なのか、もう少し詳しくおみよう。

「家族の生成理論」に依り、「家族の基本語彙時」は、家族・親族空間の實質的普遍性を構成するような語彙に相当する、と考えられるらしい。すなわち、

$$\mathcal{V}_T \supset \{H, W, F, M, S, D, B, Z\}. \quad (16)$$

これらは、あらゆる親族関係からなるような集合を考えたとき、その生成元と与える、とされるだろう。また、「家族の生成理論」は、17頁の図5に、上の語彙間の導出関係を与えておるから、(16)の右辺全体は、「性別」、<母>、H、と似た、より基礎的な語彙時から、派生できるものである、とみられている。

「家族の生成理論」の、(17)式、すなわち、

$$G = \{x \mid x \in D x^0\} \quad (17)$$

を定義されるような、出自集団、もしくはその統合構造を、派生させる仕方を、考えられるだろうか？ これには、おられるの定式化の可能性があらうけれども、私には、おとくつぎのように考えられるが、最も簡潔かつ妥当ではないか、と思わされる。

(i) はじめに、世代間の連鎖を、派生させる。これは、親型配列とする。父系集団ならば父系系譜の觀念に相当する父系連鎖を、母系集団ならば同じく母系系譜を、<家>ならば家連続性の觀念に相当する夫婦連鎖を、派生させるわけである。

(ii) その際、個体を挿入すべき位置に、非終端記号 \mathcal{V}_N に属する記号 x を用いておく。

(iii) 別に、語彙部門に、個体名を見出しとする、当該社会の個体のリストを用意しておく（これは、 \mathcal{V}_T に属する）。個体名のあ

とに、性別、父の個体名、母の個体名、(配偶であれば)配偶者の個体名、を指標として書きこんでおく。たとえば、第i番目の個体であれば、

$$x_i \langle m(f); x_j F x_i; x_k M x_i; (x_l H/W x_i) \rangle \quad (18)$$

として示される。

(iv) (i) でえた連鎖の x に、左から順に個体名を挿入する。そのとき、個体の指標を、選択制限としてはたらかせる。

(v) (iv) でえた連鎖のうち、共通部分を含むものに関して、つぎつぎの部分だけを重複あわせて、枝わかち構造とする。

たとえば、父系社会は、つぎのような父系連鎖を派生させる規則を採用しておるはずだ、ということになる。

$$\begin{cases} G \rightarrow x F G \\ FG \rightarrow \varepsilon \end{cases} \quad (19)$$

$$FG \rightarrow \varepsilon \quad (20)$$

この結果生成されるのは、次のようなものである。

$$x F x F x \dots x F x \quad (21)$$

つぎに、個体名を挿入して、(22) ~ (26) をえたでしょう。

$$x_0 F x_1 F x_2 F x_3 F x_4 \quad (22)$$

$$x_0 F x_1 F x_2 F x_5 \quad (23)$$

$$x_0 F x_1 F x_2 F x_6 \quad (24)$$

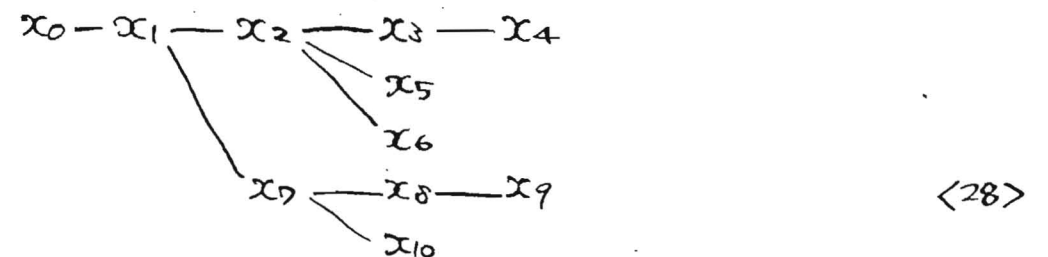
$$x_0 F x_1 F x_7 F x_8 F x_9 \quad (25)$$

$$x_0 F x_1 F x_7 F x_{10} \quad (26)$$

もちろん、たとえば x_3 は、リストに、

$$x_3 \langle m; x_2 F x_3; x_k M x_3; x_l H/W x_3 \rangle \quad (27)$$

として載っておるであろう。(22) ~ (26) に対して、上の(v)の手続きをかかると、



のような、樹をうることにならう。ただし、〈28〉における線——は、左と右とする出自をあらわすものである。

単系出自社会であれば、上のよう^に形式化できることは、容易に理解さしよう——もっとも、クラン(氏族)とリニジ(lineage)の境界、分枝規則(branching rule)、先祖の記憶があまりとなつた場合の如置、養子、私生児の扱ひ、など、論がべき点の多しを以て、いまのような簡単な形式化からも、たちまちに見えてくるが、ここでは遠慮しなす。

〈家〉の場合には、

$$\begin{cases} Ie \rightarrow \alpha HW_y Ie & \langle 29 \rangle \\ Ie \rightarrow \epsilon & \langle 30 \rangle \end{cases}$$

とでもしておけば、そこに個体を挿入して、下でに存する〈家〉連続性(過去性)を表現することにも、「家族の生成理論」の〈84〉式のような制限条件のもとで、最下世代夫婦を〈家〉連鎖の末端につけ加ふることを示すことも、できるかもしれない。

『家族の生成理論』の主張するところによれば、家族・親族領域に見出される特殊な秩序として、いまのべた統合構造のほかにも、もうひとつ、連合構造が存在する、そして、それを規定する諸規則もまた、特殊部門に書きこましておくべきだ、という。統合構造、連合構造が、それぞれ、出自関係、婚姻関係にかかわる秩序の意をあらとするならば、一般に、家族・親族といふ領域で、ことにこの二つが見出されることは、常識であるといえよう。それぞれ^の秩序に対応する規則群を、統合規則、連合規則と略称することにすれば、そのうち統合規則は、たとえば21-22頁に示したような仕方^で、定式化できるとして、では、いったい連合規則は、どのように定式化すればよいのか?

『家族の生成理論』(31-32頁)には、具体的な提案は、特になされていないのであるが、私は、7頁のように考えておくのもよいだろう。と思つてゐる。おそらく、連合規則は、統合規則と独立に定式化するようなものではないだろう。婚姻規則は、

- 積極的
 - 婚姻クラス、親族集団など、配偶者の所属すべき範囲を指定する仕方——(i)
 - 配偶者との継ぎ柄を指定する仕方——(ii)
- 消極的
 - 禁婚者との継ぎ柄を指定する仕方——(iii)

のように分類できる。このうち、(i)の形の規則は、婚姻クラスや親族集団を形成する統合規則と、相補的に作用するものである、いゆば、統合構造のがりから介入されてゐる。(i)~(iii)は、結局のところ、いまも、配偶者に関する「選択制限」として、定式化すべきものである。積極的な選択制限(ii)、(iii)にもとづいた一連の婚姻は、統合構造として自らを實現した一連の親族集団を、連合構造——婚姻交換にもとづく人的結びつきのみシステム——に組み直す、と考へらるが、この論理は、C. Lévi-Strauss, E. R. Leach, R. Needham, D. Maybury-Lewis らによつて、十分に探究されてゐる。

N.B. 上の規則 (i), (ii) と, (iii) とは、別々に扱はらる。しかも、(iii)は、あらゆる社会に、普遍的に見出される。

VI

さて、さいごに、この節では、これまでみてきた『家族の生成理論』のかかえる方法論上の諸問題点を、私の立場から整理して論じてみよう。問題は、大きく二つにわけてみる。すなわち、④3部門構成を探ることに関する、⑤外部基準が非線型配列であることに由来する、⑥規則の解釈(の枠組み)に関する、問題点がそれである。順にみていく。

はじめに、④、すなわち、『家族の生成理論』が、普遍部門/特殊部門/実用部門の3部門構成をとることについて、このような構成をみちびく必然性を、先に私は、語彙の共通性にもとづく、と解釈しておいた。では、語彙の共通性とは、いったいどのようなこと

たのか？ 私は、その含意をもう少し敷衍しておく。

『家族の生成理論』では、人間の家族・親族領域は、性関係から家族の基本諸範疇が、その要素的な存在として析出してくるときに、ひとつの家族・親族空間へと裁ち直されるのだ、そして、人類にとって、家族の基本諸範疇というのは、本質的かつ遍文化的な核がりをもった経験なのだから、それは普遍部門のなかに書きこまれて然るべきだ、との主張がなされていた。私が、「語彙」と比喩的によんでいいるのは、もちろん、この「家族の基本諸範疇」のことにほかならない。

さて、用賢なことであるが、語彙が共通する、とは、それが人類に共有された実質的普遍性であることを、いみする。そこで、言語学において、実質的な普遍性を主張した類例、R. Jakobsonの音韻分析があったことを、想いだすでしょう。Jakobsonは、よく知られているように、各個別言語において偶発的に採用される音素体系の根底に、11組の言語においても普遍的な、12組の永差的特徴の対立が存在することを、見出している。これらの対立とは、母音的/非母音的、子音的/非子音的、鼻音的/口音的、集約的/拡散的、……といった語対立なのであるが、これらの対立が、身体における分節核制にその根拠をおく不可避的な対立としてみちびきいれられている点に、私はとりわけ注目したい。というのは、『家族の生成理論』の行っている主張もまた、身体性に由来する分節の普遍性をその内容とするという点で、この音韻論の場合と、存んら異なるところがないからである。

N.B. 言うまでもないが、身体性に由来する分節の普遍性とは、決して、たとえば、人類を共通して尻尾がなく大脳容量が1400cc前後、神経系が……といった解剖学的、生理学的次元の共通属性のよすが、自然的秩序に属する事柄をさすものではない。『家族の生成理論』の図3にも明らかのように、ここで論じる普遍性とは、自然的秩序には根拠づけられない人間的な普遍性、人が身体において実現するある種の運動の形式的な特質の普遍性のことなのである。

『家族の生成理論』は、それに先行する同じ筆者の『性別論』からの延長上に位置する。この構想の流れをたどり直してみると、筆者が、人間の「身体性」のようなものと、「観念性」のようなものが錯合する領域として、家族・親族領域を描きだしていることがわかる。「性関係」とは、そのような、心身の錯合する領域においてみられた、個体間の関係をさす概念である。家族・親族空間とは、このような性関係を、家族の基本諸範疇によって噛みくつき、組みなおしたときに、うまれこくる関係の世界——親族関係の世界である。親族呼称は、性関係が親族関係へと分節される仕方を、直接に表示する。人が、家族・親族空間において、他者と出あうとき、そこには、単にひとつの直接性があるだけではなくて、分節化されたH, W, F, M, ……といった要素的關係の11ずれか、あるいは、その迂回的な複合として、その直接の性関係をとらえがえることもまた、かたらずともなうのである。

『家族の生成理論』は、このように性関係が転態をとげることを、その理論の前提としていっている。存んらば、このような分節がゆきわたるときに、はじめ、2、「語彙」（要素的な存在）とその複合を考へることができるのであり、その上にたつ構成物の秩序を、生成的に記述することが、方法的にいみあることとなるから、である。あるいは、対象を妥当に記述する生成規則の体系がうまくみつかるとかどうかは、多分に、偶然的である。なんらかの「発見の手續き」が存在すると想定する理由は、ないから。それゆえ、『家族の生成理論』が「生成理論」として成功するかどうかは、うまくいくまでは、存んともいえない。しかし、かりに「生成理論」がうまく構成できないとしても、その前提をたす、身体性に由来する分節の普遍性を、家族・親族領域において仮定するという主張までも、否定されるわけではない。この主張は、家族・親族形態に対する生成的記述を構成することができるという主張よりも、基本的であり、私のみるところ、その含意ははるかに重大である。

『家族の生成理論』の普遍部門の存りたちを、私は、語彙の共通

性としてとりだし、それをいまの如くたよりに展開してみた。では、特殊部門のなりたちも、いかに考えておくべきだろうか？

普遍部門、特殊部門は、家族・親族領域において、人間が、なんらかの秩序を形成する際に発揮する能力のリスト、という意味をもつ、といえるだろう。このうち、特殊部門は、家族・親族領域において存在しなればならぬ一連の規則性と、存在するはずのない一連の規則性と、の間にはさまれた、選択的、偶発的な諸規範のタイプロジーのリストを示すものである、と考えらる。いわゆる社会化理論が妥当するとすれば、それは、この部門においてだけである、と言わなければならぬ。

つぎに、④、すなわち、外部現象が非線型でありうる点については、まず、先に、現にWeb文法のような試みもあることを、紹介しておいたことから、あきらかなように、一般に、非線型の配列を生成させるような「文法」ないし規則体系は、実出不可能であるとは言えないことを、確認しておこう。すなわち、④は、本質的な困難をもたらすものでは、ない。ついで、いわゆる親族の統合構成に即していえば、それを、線型配列の場合になぞらえて派生させることができるのではなからぬか、という提案を、〈19〉式、〈29〉式で行なっておいた(22-23頁)。また、いわゆる連合構造は、婚姻に関する選択規則として扱うことができると示唆したが、たとえば、オーストラリアに見られたような婚姻クラスシステムは、向かもっと別の、非線型配列に関する規則で、適切に記述する方が、よいのかもしい。

さらに、⑤、発見された規則を解釈する枠組みについて。これは、「生成理論」が完成してから、ゆっくり考えなくても、遅くはないのかもしい。それに、この問題は、私のみるところでは、いわゆる「構造主義」をも悩ませた、きゆめつきの難問なのであって、容易に見通しを語れようにもない。しかし、いくつかのベテランの方がよいことが、あると思われる。

問題は、2重にこみこみしてあるようだ。ひとつは、生成規則一般

を、どう解釈するかという問題。この点については、Chomskyら生成文法にかかりきりな人も、一応の見解を提出しているようであり、ここでの問題⑤も、それと重なる。しかし、もうひとつは、『家族の生成理論』の場合にこそさら問題となるものであって、すなわち、件の生成規則が社会の集合的な過程のなかで適用されるようなものである場合、それをどう解釈できるか、という問題である。

まず、はじめの問題から、みていこう。言語学の場合を考えてみる。「生成」文法は、言語外的な諸要因——たとえば、話者の心理、言いまちがい、記憶の制限、社会状況、異々……——を一切捨象した上で、言語研究者が指定した「言語」を外的規準として、考察された抽象的な装置である。それが、経験的な言語事象、ましていわず、経験的な世界一般に、どこに何らかのつながりをもつものであるはずのないことは、いうまでもない。Chomskyが、言語の生成 generate と産出 produce とを厳密に区別するのも、このような意味において、である。このような抽象的な装置を、言語外的な現実、たとえば、人間の心的過程の実際とか、脳の生理学的組織とか、に結びつけて考えようとする試みには、当然、生成理論家は極端に慎重でなければならぬ(もっとも、言語という個別領域に関する知識が、それ以外の分野に何ひとつ寄与しないのだとしたら、研究の意義のあらがたは衰へたも同然である、と誰しも考えられることは、たしかであるが)。

それにしても、普遍文法とは、なにをいみするのか？——このような問いは、ひとつの解釈を、すなわち、言語学的な帰結を言語外的な何かある事象との関連のもとに考えるのがよいかをさぐることを、要求している。このような解釈は、理論の記述的妥当性とは、無縁である。理論の記述的妥当性が充分につつまめられたあとで考えられるようになった、理論の経験的妥当性が、解釈であるからだ。解釈は、充分妥当な理論に関し、充分しつかりした根拠にもとづいて主張されるなら、正当であるといえる。Chomskyが、自ら理論を解釈するのにもちだしたのは、言語の「習得モデル」であっ

私のみるところ、Lévi-Strauss のこうした試みの多くは、集合的事象の解釈をめぐり「悪あがき」である。ここまでとりあげてきた『家族の生成理論』は、「生成理論」という方法を探るうとしている限りで、「構造主義」と同列に論じることにはできなけれども、将来において、このような「悪あがき」にみまゆれなれという保証はない。

私が、③、解釈の問題について、指摘できることは以上であって、積極的につけ加えるべきことはなけれども、次のようには言っておこう——生成理論は、解釈がつかないことによつて、なにひとつの根拠と音かさはいしなく、理論は、それ自身の根拠によつてたつてゐるのであるから。集合的事象に見出される秩序を解釈する早道は、それらを、すべて、各個体の中にあらかじめ内蔵させてしまふことであるが、そうまじなくとも、集合的な相互過程のなかに、ある種の規則性がつけ加ゆるといふことも、充分考えらる。個別根拠もないのに、ある解釈を採用する理由は、ないだろう。

(以上、本文70枚)

本稿の記述は、数学における生成については小室直樹氏、生成文法の形式化については松村一登氏よりの、貴重な御教示に多くを蒙つてゐる。この場をかりて、ささやかな感謝の意を、表させていただきたい。

1977-6-17 D. Hashizume

文 献

(「家族の生成理論」所載のものと重複する分については、省略する。)

Birkhoff, Garrett & MacLane, Saunders 1965 A Survey of Modern Algebra (the 3rd edition), Macmillan,

奥川光太郎他訳, 『現代代数学概論』(改訂3版) 1967, 白水社。

Chomsky, Noam 1967 'Preface' in M.Gross & A.Lentin, (1967-1972):ii-iv.

Findler, N.V. & McKinzie, W.R. 1969 'On A Computer Program that generates and queries Kinship Structures' Behavioral Science 14-4:334-340.

Gross, Maurice & Lentin, Andre 1967 Notions sur les grammaires formelles, Gauthier-Villars, 相沢輝昭他訳, 『数理言語学入門』, 1972, 東京図書。

橋爪大三郎 1977. 「家族の生成理論(草稿)」, (未発表)。

Hopcroft, John E. & Ullman, Jeffrey D. 1969 Formal Languages and their Relation to Automata, Addison-Wesley, 野崎昭弘他訳, 『言語理論とオートマトン』, 1971, サイエンス社。

稲葉栄次 1957 『群論入門』, 培風館。

Jakobson, Roman & Halle, Morris 1956 'Phonology and Phonetics' in Fundamentals of Language, Mouton, 柳崎恭子訳, 「音韻論と音声学」, 『一般言語学』:79-124. 1973, みすめ書房。

Katz, Jerrold J. 1966 The Philosophy of Language, Harper & Row, 西山佑司訳, 『言語と哲学』, 1971, 大修館。

Lévi-Strauss, Claude 1967 Les structures élémentaires de la parenté, (deuxième édition) Mouton,

大芝 猛 1977 「モンタリによるウエア文法と平面グラフ」 『数理科学』15-6(No.168):59-66.

田上隆司 & Peng, F.C. (eds.) 1976 『手話をめぐって On the Nature of Sign Language』, 文化評論出版。